

2005年 12月 26日

三井上高井戸運動場クラブハウスについての見解

社団法人 日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 吉田 鋼 市

東京都杉並区高井戸東一丁目の三井上高井戸運動場に建つ同クラブハウスは、三井合名会社の社員およびその家族の厚生施設として、約3万坪の広大な敷地の中に1936年(昭和11年)10月に建設された。建物の構造形式は鉄筋コンクリート造、半地下1階・地上2階建てで、屋根全面を陸屋根(屋上庭園)とし、白い無装飾の壁面と四角い窓を持った近代主義的なデザインの建物であり、その意匠は端的に言って瀟洒・軽快である。延床面積は約330坪で、設計者は久米権九郎(1895年～1965年)である。

久米権九郎はドイツやイギリスで建築を学び、シュツットガルト工科大学で学位を取得して1929年(昭和4年)に帰国し、同年に渡辺仁と設計事務所を開設、やがて1932年(昭和7年)には独立して久米建築事務所(現・株式会社久米設計)を開設した。同クラブハウスは独立後まもない時期の作品であり、またこの設計依頼は小学校の頃から親交のあった三井八郎右衛門高公(1895～1992)からであったと伝えられている(2歳年上の久米権九郎の兄・民十郎と三井八郎右衛門高公が学習院の同期であった)。久米権九郎の初期の建築作品は現存例が少なく、また戦前の作品は木造和風(軽井沢万平ホテル:1936年)も含めてデザインが多様であったことから、同クラブハウスのようなモダンなデザインは、久米の初期の作品の中でも貴重なものといえる。

同クラブハウスはまた、その設計内容においてクラブハウスおよび社員の厚生施設という用途を満たしつつ、その用途に相応しいカジュアルな性格を近代主義の設計手法で表現することに成功した点において、戦前の日本の近代建築の中でも傑作として位置づけることができる。具体的には、以下のような点にデザインの多様性、瀟洒・軽快さといったこの建物の特徴を見ることができる。

1) 東面のデザイン: 採光・通風・眺望の重視と開放的な立面

建物の平面計画は横長の矩形を基本とし、半地下階には更衣室・シャワー室、1階にはレストラン、2階にはクラブ室(会議室)を設けている。1階のレストランと2階のクラブ室は横長の1室大空間として東西両面に開口部を設け、いずれも東面にテラスを設けるとともに壁面を全てガラス建具とすることで室内への採光・通風と運動場への眺望を十分に確保している。同様の姿勢は、1階を高床にした点や2階をセットバックさせた点、2階のガラス建具をカーテンウォールとした点にも窺える。こうした工夫は運動場に面する建物の東側立面において、クラブハウスを水平線を強調した開放的な建物として印象付けることに成功している。

2) 北面のデザイン:ランドマークとしての階段室

建物の北面には半円形平面の階段室が設けられた。幅が細く背の高いこの階段室の壁面は、建物の北面において無装飾の白い壁面として強調され(四角い窓や時計などによってさらに強調されている)、東面の開放的な立面と明確な対比を形成している。施設を利用する社員たちには「船」のイメージで親しまれたように、このデザインは建物の北東に広がる広大な運動場から遠望されるランドマークとしてクラブハウスを印象づけている。また、この階段はスラブ構造でできているため、内部空間においては白い無重力空間のような印象を見る者に与え、内部空間においても見所の一つとなっている。

3) 西面のデザイン:半地下による視線の操作と抽象的なマスの構成

外部から訪問する利用者は、敷地西側に設けられたアプローチ動線を通り、建物西側に設けられた駐車場・エントランスから建物に入ることとなる。建物の平面を南北方向の横長平面としたことに加え、建物の西側地盤を東側よりも半階分下げたことにより、来館者はアプローチ時の動線では運動場を目にすることがなく、階段を半階分上り、主室であるレストランに入って初めて広大な東側のグラウンドを目にすることになる。このように、ここでは細長い平面計画と床段差を巧みに組み合わせて、ドラマチックな視覚的効果が生み出されている。西面の外観デザインは、水平面を強調した車寄せと小部屋の付属室の巧みな配置により、全体が白い無装飾の矩形ヴォリュームの構成としてまとめられており、東面の開放的なデザインとも北面の曲面を使ったランドマーク的なデザインとも異なる、抽象的なモダンデザインとして特徴付けられている。

